【実践現場の声】

血のつながりと家族／Blood Ties and Family

渡辺みはる*

はじめに ── 不妊症治療から養子という選択へ

長野県のほぼ中央に位置する諏訪湖という湖のほとり，人口2万人ほどの小さな町に，私の勤務する諏訪マタニティークリニックがあります。産科・婦人科・小児科と不妊症治療の病院として，今年で開院して47年目を迎えます。私自身はそこの元患者で，33年前の長女の出産後に縁あってスタッフになりました。当初は保育士として育児相談に携わり，のちにカウンセラーの資格を取得し，不妊症治療の外来に併設しているこうのとり相談室で勤務するようになりました。

こうのとり相談室は開室して20年が経ちます。相談室での相談内容として，治療断念については大変多い相談事項であり，今後の人生の方向性のひとつとして養子縁組という言葉も患者さんからあがるため，それについてしっかり対応できるようにしてきました。養子縁組についての相談があると，集積してある養子縁組に関する資料などを渡して，できるだけ詳細かつ具体的な情報を提供し，患者さんが何らかの決断をするまでは何回でも相談を受け入れました。さらに相談室発行の機関紙に養子縁組を行った方の手記を掲載したり，「te to te（てとて）」という名称の里親会を作って，縁組完了家族とこれから縁組を考えていこうというご夫婦たちが交流し，実際面において詳細な情報交換が行えるようしてきました。また，室内の集まりの他に子ども中心のイベントとして戸外に出てリンゴ狩りやさくらんぼ狩りなども行ってきました。

「te to te」の集まりを続けてみてとても良かったと思ったことは，前の年はご夫婦だけの参加であったのに，翌年そこに養子として迎えた赤ちゃんが加わった3人家族での参加になった方が会場に入ったとき，「よかったねー，おめでとう！」と拍手で迎えてくださったり，ハイハイしていた赤ちゃんが走れるようになっていて皆で驚いたりと，それぞれの夫婦の変化や子どもの成長を喜びあえる時間は，とてもあたたかいものになったことでした。また，これから縁組を考えていこうというご夫婦にとって，

＊医療法人登誠会　諏訪マタニティークリニック

血のつながりがなくても“こんなにも親子が似ているものか”という養親子を目の当たりにすることで，ご自身たちが進もうとしている道についての不安や心配を軽減することができ，「より現実的に将来を考えることができるようになった」と言われました。20年間で24組のご夫婦が28名の子どもと出会い，うち24組が特別養子縁組を結んでいます（4名は手続き中）。

不妊治療現場からの発信の意味

「血のつながりがなくても養子に迎える子どもを我が子と思って愛することができるのか？」これは養子を考えるとき多くの方が抱く不安です。それについて相談室としては，「血がつながっている間柄でも世の中では悲惨な事件がたくさん起きていますよね。血がつながっているから家族なのではなく，家族は愛でつながっていくものだと思うのですが，いかがでしょう」とお答えしています。

以下，3名の養子を迎えられた方の経験と思いを紹介したいと思います[1]。

二人の養子を迎えたAさん（後段に手記あり）が過去のご自身を振り返って言われた言葉が「どうして自分たちはあんなに産むことにこだわっていたのだろう」ということでした。院内での里親会の際，不妊症治療をしていた医師と話ができる場を設けたことがあるのですが，そのとき医師が「お力になりきれずに申し訳ありませんでした」と言ったところ，Aさんは「とんでもないです。先生に一生懸命やっていただいて今があるんです。私は不妊症治療がうまくいかなくて本当に良かったと思っています。自分が妊娠していたら，この子の親にはなれなかったのですから」と言われました。

ご縁の元で子どもと出会い親になることができた方々は，子どもと一緒に過ごす時間によって人としての経験値を高め，人生の彩りが増していきます。不妊症治療中に養子縁組のことを相談に来てくださる方々には「ぜひ児童相談所や民間の縁組団体の勉強会に足を運んで現実を知ってください。そして気持ちが切り替わるならば，なるべく年齢の若いうちにお父さんお母さんになってもらいたいです」とお伝えしています。

不妊症治療においては自分たちの子どもを授かることが究極の目的ではありますが，自らの妊娠出産にこだわらず，“他の人から生まれた子どもと共に生きるという選択肢”があるということを知り，またそれを“すでに経験している方々と出会える機会”が治療施設の内にあることは，患者さんにとっては大変有益なことではないかと思っています。

アイデンティティについて

人はたいていの場合，目標を達成するためには努力をしたり頑張ったりするわけですが，不妊症治療においてそれはまったく通用しません。頑張れば報われるという類のものではないとわかり，期待と落胆を繰り返すたび，疲弊していく自身の心とどう向き合い折り合いをつけたらいいのかを悩むようになります。

この治療においては，反復される喪失体験によりアイデンティティが崩壊するということが専門家の皆さんの間でも言われていますが，現場の私もそれを痛感してきました。

しかしそのような辛い不妊症治療にピリオドを打ち，養子を迎え家族を作ることに人生の舵を切り替えた方々の中には，崩壊していたであろうアイデンティティを，喪失を上回る幸せと

1　Aさん，Bさん，Cさんの事例掲載につきましては，諏訪マタニティークリニック院長根津八紘からの承諾を得ております。AさんBさんCさんには，本稿へのお話しの掲載について快く了承いただきました。心より感謝申しあげます。

必要なつながりによって再構築した方々がいます。そんな事例をご紹介します。

Bさんの場合

Bさんの治療期間は10年でした。今度こそはと期待して治療に挑んでも成果が出ない，これを10年もの間繰り返していたわけですから，喪失などという言葉では言い表せないほどの辛い体験だったと思います。しかし，当院の里親会への参加がきっかけとなり，里親登録に進む決心をして，1年後に新生児と出会って親になることが叶いました。

以下はBさんが子育てに入ってから私に寄せてくれたメールの一部です。

> ある里親の先輩から「私たちは心で子どもを産んだの。普通の妊娠はお腹の中で10ヶ月だけど，私たちは何年も何年もかけて産んだのよ。治療期間はこの子を“心”に宿していた期間」と，こんな素敵な言葉をいただきました。本当にそのとおりだと思いました。そして治療したからこそ見えた人の痛み，優しさ，気持ちの部分で人間としても成長させてもらえました。この10年は娘に会う運命のための期間だったと思います。

辛かったはずの治療期間に対して「治療をしたからこそ見えたものがたくさんあった」という肯定的な振り返りの言葉と，「10年間は娘に会う運命のための期間だった」とのBさんの言葉に，彼女の10年に伴走してきた私としても，とても感慨深く読ませてもらいました。

Cさんの場合

Cさんはすでに縁組が完了して子育てに入っていた方でしたが，養子を迎えてもいいことばかりではありませんでした。その理由は育児の中で不安が出るたびに「産んでないから？」と思ってしまう傾向があったからです。そんなあるとき彼女から以下のようなメールが届きました。

> 小学一年生になり，宿題や明日の準備などやることは増えたのに，元気すぎて毎日遊び足りなくてでも遊びすぎては眠くなり…。その反動は殴る蹴るという私への攻撃になります。しまいには「ママなんて大嫌い，あっち行け」「もう帰ってくるな」と言われてしまいました。せっかく家族で一緒にいるのに私だけ独りぼっちに思えて，“どうして子どもを迎えたのか”とまで考えてしまうようになりました。

早速相談室に来てもらって直接話を聞きました。メールに書ききれなかった出来事のあれこれを涙とともにすべて吐き出し，少し落ち着いた彼女に，「大嫌いって言ってもらえるようになって良かったじゃないですか」と言ったところ，彼女はポカンとしました。そして私が続けて「二人して毎日本気で悩んで本気でぶつかった，その成果が出たんでしょう。本物の親子になってきた証拠です」と言うと，彼女はまた泣きながら，「本当ですか。私たち，本当の親子なんですか」と繰り返し聞くので，「はい，最初から本当の親子ですけれどね」とお答えしました。

このお子さんの様子は養子養育の中ではよく言われる「お試し行動」に該当するのかもしれません。しかし，実子を育てている中でもこういったケースはあることですし，いわゆる反抗期や，どの子も通る発達段階として捉えることもできると思うのです。事あるごとに“養子であること”を前提に考えていくと，こういう意

識に陥ってしまうのではないかと思いました。ですから私は「大嫌いって言ってもらえるようになって良かったじゃないですか」とお伝えしたのです。

それからしばらくしてまた彼女からメールが届きました。

> お父さんが背が高いから大きくなるよね。お母さんがこうだから…etc. とまわりの人に言われると，以前はいちいち引っかかって気にしていたんですが，最近では「そうかなぁ？　そうなるかな？」と適当に答えられるようになりました。そして心の中で「私たちは彼の遺伝子がどんなかは知らない。だから何が得意なのか，何が苦手なのか，それは誰かに似ていたり，遺伝子だったり，そういうことではなくって，すべてがあの子オリジナルだから，うちの子の可能性は無限大ってことよ！」と叫んでいます。不妊症治療のときからずっと私のことを知っていてくれた渡辺さんから，あの日親子のお墨付きをもらえたので，私はもう大丈夫です。

このメールを読んで私も，彼女はもう大丈夫だと思いました。

喪失を上回る幸せを得たBさんと，必要なつながりのあったCさん。それによってお二人のアイデンティティは，再構築を成せたのではないかと思っています。

Aさんの手記 ―― 日々の暮らしが家族を作る

私は30代半ばから40歳までの数年間不妊症治療を受けた。体外受精の回数は初めのうちこそ把握していたが，そのうち数えるのをやめたので詳しくはわからないが相当数に上るはずだ。

皆さん同じだと思うが，当初は毎回の治療のたびに大きく一喜一憂し，期待に反してダメだとわかったときのダメージは耐え難く，帰りはかならず車の中で大声で泣いた。 そんな中，私が模索し始めたのが「里親になる」ことだった。治療を卒業して夫婦二人の暮しをエンジョイする，もちろんそれも大事な選択肢だが，それよりも血縁はなくとも子どもと共に歩む人生というのはどうだろう，そんなふうに思い始めていた。

里親に関してまったく知識がなかったので，ネットなどでいろいろ調べてみた。そして，重要な点に気がついた。それは年齢だった。

里親と一言でいうが，実際のところ近年は特別養子縁組をするケースが多い。従来の里親は，生みの親に代わって子どもを家庭で育てる役割をする人のことで，実際の親ではない。子どもは生みの親の姓のままだし，里親とは法律上の関係はない（とはいえ，大事な家族であることは間違いないが……）。それに対して特別養子縁組をするというのは，裁判所の厳格な審判を経て，子どもと生みの親との法律上の関係はなくなり，養親のみが子どもの親になることで，実の親子となんら変わりない関係になるというものだ。里親になることに，年齢的な規制はあまりないが，特別養子とするには，親と子の年齢差が40歳くらいまでが望ましい，というような表現をみつけ，私はおやっと気になった。中には，特別養子を望む人は40歳までと，年齢制限を設けた紹介機関もある。理由としては，子育てに費やす体力とか，教育のための経済力とか，そういったことがあるようだが，それにしても40歳ならもうすぐやってくる，さてどうしよう……。不妊症治療の卒業をまだ決心できてはいなかったが，一方で，里親，養子縁組という方法も，私の気持ちの中では次第に現実味を帯びていった。

ただ，夫の気持ちは私とはかなり違った。「血のつながらない子どもを育てるというのは

とても責任の重いことで，自信が持てない」というのが当初の反応だった。子育ては多分とても大変なもので，その大変さを乗り越えていくには「自分の血を分けた子だから」という事実がないかぎり，音を上げたくなってしまうのではないか，踏ん張りがきかなくなってしまうのではないか，というのが夫の捉え方だった。私が「子どもなんて皆かわいい」と言ってみても，「そんな簡単なことではない」と，夫はとても慎重に考えていた。それもそうだろうと思う。不妊症治療の原因になっていたのは私であって，夫に問題はなかったのだから，なかなか自分の子をあきらめきれない気持ちは強かったのだろう。また，男性ならではの責任感の強さも，より慎重な発言につながっていたのかもしれない。そのあたりの二人の話し合いはしばらく平行線をたどっていた。しかし年齢のことが気になっていたのも事実だったので，迷いを残しながらも私たちは里親登録をした。

里親に登録したところですぐに子どもとのご縁があるわけではない。何より，まだ制度のこともしっかり把握しきれていないし，気持ちの整理ができているわけでもない。そこで私たちは，いくつかの勉強会や研修などに参加した。実際に里親となっている方の話を聞いたり，児童福祉の専門家の話を聞いたり，本を読んだり。そんな中であるとき，夫の気持ちが変わった。当初は生みの親から子どもを引き離してしまうことになる，という抵抗感を持っていたのだが，研修などを通じて知ったのは，「世の中にはどうしても一緒に暮していかれない親子がいる」ということ。そして，里親や養親は「そういうやむを得ない事情の生みの親に代わって，子どもを大切に育てていくもの」ということ。夫の中で，すとんと胸に落ちたことがあったのだろう。そこから先は具体的に子どもとのご縁に少しでも近づくため，どうしたらいいのかを二人で考え行動した。そしておそらくこのあたりで，私たちはまだわずかな希望を持って続けていた不妊症治療を卒業して里親の道に進んだ。迷いがまったくなかったといえば嘘になるが，血のつながりよりも何よりも親になることを選んだのだ。そこで迷いを吹き飛ばしてくれたのは，先輩の養親さんたちの姿だった。

血のつながらない家族とはどういうものか確認したくて，養親家庭の集まりに参加してみたところ，お会いした養親子はどのご家庭も不思議なくらい顔が似ていた。体型や仕草もとても似ていたのである。「血のつながりよりも日々の暮らしこそが家族を作るのだ」と心底思った。そして一人の養親さんがこう語ってくれた。

「血のつながらない子どもを育てるといってもそう難しいことではない。ごくごく普通に子育てしている」と。私の迷いがすうっと消えた瞬間だった。

そしてしばらくして，我が家にもかわいい「我が子」がやってきてくれた。子どもを迎えてから生活は一変し，自由な時間はほとんどなくなった。毎日が本当に慌しく忙しい。でも，これはおそらく子育て中の家庭ではどこでも同じような光景だろう。何より，子どものことはかわいくてしかたがない。それは夫も同様で，お風呂に入れたり，保育園に迎えに行ったり，とてもまめまめしく面倒をみてくれている。夫の友人が遊びに来た際，一杯やりながら一言しみじみと「親ばかってこういうものかっていうのがわかったよ」と語っていた。その言葉を聞いて私は胸が熱くなった……。

長く不妊症治療を続けて，結局，私は子どもを“産む”ことはできなかったけれど，子どもを“育てる”ことはできるようになった。子どもを産めなかったことには後悔も未練もない。目の前にいるこの子が何より大事と思えるからだ。むしろ「治療がうまくいかなくて良かった。

だってそうでなければこの子と出会えなかった訳だから」と，こんな考えすら浮かぶくらいに幸せだった。あんなにたくさん悩んで，涙して，夫ともとことん話し合って，だから今があるのだとつくづく思う。くじけそうになってもなんとか自分を励まして，次の目標に向かって努力する，そんな力を不妊症治療を通して身につけることができたのかもしれない。それでも，一人ではなかなか乗り越えられないときには相談室でお茶を飲ませてもらったり，ちょっと弱音を吐かせてもらったり，そんなふうに支えられてなんとか乗り越えさせてもらったのだと思う。いろいろと辛いことがあったからこそ，今ある幸せにありがたいという感謝の気持ちを忘れてはいけないと，強く感じている。

そしてその子が3歳のとき，私たちはもう一人子どもを迎えることができた。下の子は出産直後に産院に迎えに行った。これも不思議なことに，血のつながらない姉弟なのだが，顔が“似ている”のである。ご縁以外の何ものでもないとつくづく感じた。

血のつながりを補うために，一緒にいなかった時間と空間を埋めるために，里子・養子の子どもたちは，里親・養親の愛情（や忍耐力？）を見極めるべく「お試し行動」をすることが少なくないし，また周囲の人たちにどこまで事情を話すのか話さないのか，子どもへの真実告知はいつどうするのか，ルーツ探しをどう手助けするのか，ただでさえ不安定な思春期に自身の生（せい）に戸惑う子どもとどう向き合い支えるのかなど，里親子・養親子ならではの悩みはその年齢ごとに次々発生する。でもそんな迷いがくることを恐れていてもしかたがない。私たちはできるだけ子どもたちに寄り添い，支えてあげるしかないのだと思う，親として……。

そしてそういったこともありながらも，やはり私は「血のつながらない子どもを育てることはけっして特別なことでも難しいことでもない」という先輩養親さんからいただいた言葉をより多くの方に伝えたいと，そして日々の暮らしの中でだんだん顔が似ていく微笑ましい親子が一組でも多く生まれてほしいと心から願って，この原稿を書かせていただいた。

自分自身の体験から

実は，自分自身も血縁のない家族の中で育った体験があり，それが養子縁組に思い入れる理由の一つにもなっています。ここでは当事者としての視点から，家族における血のつながりについて述べたいと思います。

私の戸籍の母親欄には3人の名前が載っています。私を産んだ母親は父の不貞を理由に私の物心がつかないうちに家を出ました。写真一つその存在を示すものを残していきませんでした。養育に困った父は，朝早く私を民間の施設に預けて仕事に行き，夜遅く迎えに来ました。どれくらいその生活が続いたのかは定かではありませんが，いつも暗い所に隠れて泣いていたという記憶だけがうっすらと残っています。

その後，「みはるちゃんが不憫なので世話をしてあげたい」と父との結婚を求めた女性が現れ一緒に暮らすようになりました。しかしその女性は結婚したあと態度を急変させ，私は父のいない空間で“言葉と行動による暴力”を受けるようになりました。「今日も生きてるの」という10年以上繰り返されたこの言葉に，私は死を考えるほど傷ついていました。学校の先生，親戚，近所の人と私のまわりにいる大人たちは，私の置かれている環境に少なからず気づいていたとは思いますが，誰も何もしてくれることはなく，また私からもまわりの大人に助けを求めはしませんでした。何より大好きな父には心配をかけたくない一心で，不自然な日常を必死でごまかし，つくろっていました。そうして，学

区が関係なくなる高校入学を機に祖父母の家に身を寄せ，そこでようやく長い悪夢を終わらせることができました。

祖父母と暮らすようになって1年後，父はその女性とも離婚し，一緒に暮らせるようになったと迎えに来てくれたのですが，そこには，父と別の女性とその女性の子どもとの暮らしが始められていて，私はそこに加わることになったのです。その女性が父の3番目の妻であり，戸籍上3番目の私の母となります。高2という多感な年齢から始まった新たな家庭生活。そこからの40余年もまた，辛い歳月でした。

このような経緯で私は，二人の養母と普通養子縁組をしていて彼女たちの養女となりました。

そして今から5年前のことです。私のいとこを名乗る人が突然現れ，私を産んだ人と会ってほしいと言いました。私はまったくその気はなかったのですが，どうしてもと懇願されやむなく他県の施設にいるその人に会いに行きました。思慕も遺恨もないので会っても平静を保てる自信があったのですが，通された施設の一室，その人は私を見るなり「お母さんのこと恨んでる？」と言いました。思いもしない言葉に平常心がかき乱され，涙が溢れてきてしまいました。そんなことがあったのに私はその後，6回その施設に面会に行っています。なぜ足を運ぶのかというと，それは誰も面会に来ない孤独なおばあさんを知ってしまい気の毒に思うからです。

昨年は娘と息子，そして孫たちが旅行方々面会に同行してくれました。二人の感想は，その老婆と私が似ているということ，さらに私自身がその女性を母親と思えないというのと同じで，子どもたちも自分の祖母だとは思えない，ということでした。その理由について娘は，「一緒に暮らしたこともなく，何も思い出がないから」と言い，息子は，「今は縁が切れたけれど，以前は祖母という立場の人がいたから」と言いました。どういうことかというと，父と彼の3番目の妻（私の2番目の養母）と私たち家族は二世帯住宅で一緒に暮らしていて，娘や息子は生まれたときからその人を祖母と思って育ってきていたからです。

どれだけぞんざいな扱いをされてきていたとしても，2番目の養母とは40年以上“家族”として一緒に生きてきた時間があります。複雑ではありつつも，共に積み重ねてきた人生の時間によって，私は彼女に向けて，生みの母には抱かない“情”がありました。

血のつながりはあるけれども一緒に過ごした歳月のない生みの親と，血のつながりはないけれど歳月はあった養母とでは，後者の方を“家族”として意識することから，私個人の見解として“家族においての血のつながりの意味”はAさんがおっしゃっていたように「日々の暮らしが家族を作る」，そういうことだろうと思います。

私はまだ生みの親のことをお母さんとは呼べませんが，昨年の自分の誕生日に，生んでくれたことへの感謝のメッセージを彼女に残しました。私が娘だともはっきり認識できないこともありますが，こうして面会を続けていけば，この先ひょっとして，“彼女を家族の一人”と思うようになる日が来るかもしれません。

まとめ

当院では生殖因子のないご夫婦への不妊症治療として，身内から因子の提供を受けて子どもを授かる治療の実践をしていますが，遺伝子的には授かった子どもとは実の親子ではありません。そこで皆さんの思う血のつながりについて尋ねたとき，こんな意見が寄せられました。

・誰の遺伝子だとか，血のつながりだとか，どこの家系だとか，そんなことは難しく考

え過ぎてしまう大人しか言わないことじゃないか。笑って，泣いて，一緒に過ごす家族であるかぎり，「私の子ですが何か？」ですむ話だと思う。

・目の前に愛してやまない子どもたちがいるという事実だけで十分。自分の血が流れていないことなんて考えることもない。

・親子の関係は自分たちの心が決める。

こうした気持ちを伺うと，日々の暮らしにおいて“血のつながり”ということをまったく気にしていないように感じられます。

血のつながりの有る無しに関わらず，子どもは本物の愛を受け，その愛のある家庭の中で育ってほしいと思いますし，親になる皆さんにも幸せになってほしいと思います。

血のつながりを超えるところの，「愛でつながる家族作り」のお手伝いをこれからも心を込めてやらせていただこうと思っています。